

元カレのケイトと再開してから、不連続きだった私の人生は、想像もつかない明るい方向に転がり始めた。

会社を辞めたことはもちろん、彼の所有する東京のタワーマンションの一室に同居することになるなんて。

「ねえ、ほ、本当にここでいいの？」

(私からは、ペット可なら嬉しいって答えただけなのに……)

ケイトが契約した新居へ引っ越し当日、人気エリア3LDK+WIC+WIC+SIC(なにそれ)のフロントのコンシェルジュに怯み、豪華な45階の部屋を見渡しながら、私は不安げに尋ねた。

「当然だろ？ 俺たちの新しい巣なんだから」

ケイトはシンプルなスーツ姿のまま、玄関で軽い荷物を受け取る私を見下ろす。

「巣って……鳥じゃないんだから……♡」

「嫌？ いいじゃん、オシドリとかペンギンみたいで可愛いし。夫婦仲良くしよう♡♡」

そう言って最愛の婚約者……ケイトが私の腰に手を回す。スーツ越しに伝わる体温だけで、幸福と快樂を教え込まれた身体が熱を帯びていくのを感じた。

「嫌とかじゃなくて……そ、そういう意味じゃ……っ」

「じゃあどういう意味？ 引っ越し初日から誘ってるの？」

「あっ！♡ちょっ……誘ってなんか……♡♡♡」

否定しようとした瞬間、唇を塞がれた。深く、執拗に、まるで空白期間を取り戻すかのように。大好きなケイトの大きな手がスカート越しに太ももを撫でる。それだけで、足がガクガク♡震えてしまう。

「んっ……♡ちゅっ……あ……♡♡はあっ……う♡」

「……………んっ♡……ちゅ……ちゅば♡♡♡」

ケイトの器用な舌が口腔内を蹂躪する。歯列をなぞられ、舌を絡め取られ、昨夜の濃厚なクニニを連想させるような……息ができないほど激しい口づけ。

「……っ……あん♡もう、ケイト……っ♡♡♡」

「……ん♡まだ何も始まってないのに、そんな顔しないでよ。見てたらチンコイライラしちゃうんだけど♡♡」

やっと解放されたときには、口周りがべちょべちょ♡で、腰が抜けそうになっていた。彼の逞しい肩にしがみついて、プルプル♡立っているのが精一杯だった。けれど、ケイトが苦笑いしながら、私の額に軽く口づけするのが幸せだ。その目は楽しそうで、少し意地悪で……そして確かに「私を愛している」と語っている。

(もう好きすぎる……♡同窓会に行ってよかった♡ケイトのせいでクリちゃんも、きゅんきゅんしちゃうよ……♡♡)

会えない時間が長かったからこそ、毎日会える幸せを噛み締められる。毎日毎夜……ケイトに抱かれる自信が私を元気にしていた。

(最後に抱かれてから8年……彼のセックスを忘れられなくて辛かったのに、いざこうやって一緒にいると、これまでの悲しさなんて、吹き飛んじやいそう……私、単純になってきてるのかも……♡)

「仕方がない。夜まで我慢するとして、まずは荷解きだね……ん？ どうした？」

私を抱きしめたまま、ケイトが廊下のダンボールを見渡しながら言う。その口調は普段の、余裕のある飄々とした感じに戻っていた。私は少し恥ずかしくてうつむいた。

「その……実はまだ、この家の広さに慣れなくて……３LDKって……二人暮らしには広く感じるし、ファミリー向けとかじゃないの……？」

しかも最新式のハイテクキッチンがあり、シェークロゼットやウォークインクロゼットは、ほとんど立派な個室みたいだった。１Kに暮らししていた私にとっては、まるで夢のような……愛しい人とのリッチな生活が待っているようで、実感が湧かない。

「……ずっと一人暮らししてきたからかな……ちょっとまだ落ち着かないかも」

「大丈夫。俺だって実際、そわそわしてるよ。ようやく捕まえた姫と、暮らすんだ。浮かれてるに決まってる……」

瘦せた頬を綻ばしたケイトが小さく瞬きすると、私の手を引いてリビングのソファへと誘導した。そして驚くべき行動に出る。私を横向きに座らせると、自身の膝の上に抱きかかえたのだ。

「……今は二人暮らしだけど、すぐ三人になるだろうし。姫が早く慣れるように、俺がサポートするから」

(そんな事言われたら、きゅんきゅんして落ち着くどころじゃない♡ケイトの膝の上……あっ……♡♡)

背後から腕を回され、大きな身体に守られるような体勢。けれどそれだけではない。明らかに意図を持って私の胸に手が伸びていく。Ｔシャツの上からでもわかる、ケイトの大きな骨張った手のひら。

「あっ！？♡♡ケイトっ！？♡♡ あん……♡だめ……っ♡♡♡」

「なんでだめなの？♡ ここは俺たちの巣なんだよ。巣箱の中なんだから、警戒する必要ないよ……♡」

耳元で囁かれる低い声が、脳髄を刺激する。

(こんな風に毎日されてたら……私、幸せ過ぎておかしくなっちゃうよ……♡)

「でも……あん♡に、荷解き……っ♡」

「後でいいよ。先に姫を荷解きしたい……って、うわ。

なんか俺、オッサンみたい事言ってない？」

「もう……♡ケイトったら……私たち三十路なのよ……あんっ♡」

「とにかく……家具は運んであるんだし、焦る必要はないよ。だから今は……三十路らしくエロいことで楽しませてあげる♡」

ケイトの手がさすさす♡撫でながら、Tシャツを捲り上げる。抵抗する間もなく、彼の指がブラジャーに触れた。

「んっ！？♡♡♡あっ……んん……っ♡♡」

大きな手のひらが、ブラジャー毎おっぱいの膨らみを包み込み、ワイヤーを避けて柔らかに揉み込んでいく。ブラジャーの隙間に差し込んだ指先が、乳輪を優しくなぞる。

「姫の乳首、もう期待して勃ってるよ。コリコリしてかわいいなあ……♡」

「やっ……！♡耳元でエッチにささやかないで……っ♡あうっ♡♡」

ふにふにっ♡もみもみっ♡もみもみもみもみッ♡♡
もみもみもみもみッ♡♡♡♡

(だめっ♡ケイトの触り方やらしすぎて、おっぱい蕩
けちゃう♡ケイトのエッチ……気持ち良すぎておかしく
なっちゃうの……♡)

「じゃあ……直接見てあげる。ほら、乳首摘まれたらク
リトリスみたいに、すぐに感じちゃうんだよね？」

ケイトはブラジャーのカップを少し下げて、乳首が飛
び出るように露出させた。器用な指が、クリクリ♡と硬
くなった先端を摘む。

「ふぁっ！？♡♡♡だめっ！♡あ……ああん♡」

思わず背筋が仰け反り、彼の膝の上でピクピク♡悶え
る。ケイトが耳たぶをかぶかぶ♡甘噛みしながら、更に
強くこねる。コリコリ♡した乳首を、きゅうきゅう♡芯
ごと引っ張った。

「ひゃうっ！？♡♡♡あう……♡ケイトっ……やあ……
♡♡ん♡」

「おっぱいよりクリ派だったのに、すっかり乳首責めも
好きになったね……ね？ この間行った夫婦風呂で、乳

首だけでイケたの覚えてる？」

(知ってるくせに……意地悪な言い方ばかり……っ♡)

ケイトの指が執拗にピクピク♡乳首を刺激する。軽く捻りながらぎゅうぎゅう♡引っ張られると、甘い痺れがビンビン♡全身を駆け巡る。

「ほんと……育て甲斐のあるお豆ちゃんだね。俺は褒めて伸ばす方針だから、優しく撫でて……もっと敏感にしてあげるね……♡」

「ああ……んっ！♡♡やだあ……これ以上、敏感だなんで♡感じすぎちゃうのこわいよお……っ♡♡」

「愛されるのは怖くないよ……♡気持ちが良いだけ……♡」

指の腹で円を描くように優しく擦られると、それもまた快感の波となって押し寄せる。強弱を使い分けた攻め方に、息が荒くなるばかりだった。

「ふふ……姫の突起って、本当にエロい反応するよね。恥ずかしそうにもじもじしてると思えば、もっと弄ってほしそうに尖ってくるし……♡クリなんか皮の中でぱん

ぱんに腫らせてさ……♡♡」

「ひゃんツッ♡そ……んなこと……♡んんっ！？♡♡
い、言わないで……っ♡」

(腫れたクリちゃんを剥き剥きされるの、思い出しちゃう♡♡本当のことだけど……恥ずかしすぎるよお……っ♡)

巧みな手がさらに大胆に動き出す。片方の胸を揉みしだきながら、もう片方の乳首を親指と人差し指で挟み込んで扱くように上下させる。

「乳首クリトリスみたいで気持ちいい？ 俺の前では、素直になりなよ？♡」

「んっ！？♡♡あぁっ！♡それダメっ……♡♡♡感じ過ぎちゃう♡♡♡気持ち……いい……っ♡ケイト……ケイトの指い……すご……すごいっ♡もう……我慢できないよお……っ！♡」

コリコリこり……♡♡ぐりゅりゅりゅぐりゅりゅりゅ……♡♡カリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡

私の反応を楽しみながら、ケイトの攻めが激しくなっ

た。乳首を摘んだ指先が、ブルブル♡小刻みに振動させられ、先端に集中した神経が、すぎた快感の電流を全身に走らせる。

「ああっ！？♡♡ぶるぶる♡だめえっ♡乳首だけでイチャう……っ♡♡」

「いいよ……見せてよ♡ 俺の指でシコられて、おっぱいいイキイキする可愛いところ、ぜんぶ……♡」

「あ、ああ～っ！！♡♡♡ケイトおおお……おっぱいいイクイクしちゃうの、見てえ……っ！！♡♡♡」

ぴくんぴくんツツぴくんぴくんツツ♡♡

強烈な痺れが押し寄せ、思わずケイトの膝の上で背中を大きく仰け反らせながら、軽く甘イキで果ててしまった。頭の中が真っ白になり、ぐったり弛緩した全身が痙攣する。

「はあ……はあ……っ♡♡ケイト……酷いよお……♡」

「だって、姫があまりにも美味しそうだったから……ごめんね♡でも、お互い……夜まで待てなかったでしょ？♡♡」

「ごめんね……♡♡我慢したら方が、気持ち良くなれるから……♡♡俺も興奮しすぎだよね……♡♡」

謝りつつも手を緩める気配はない。反対に圧力を強めながら、語りかける。

「でもほら……こうやって圧迫されると、中で指が動く感じがよく分かるでしょ？♡♡トントン好きじゃない？♡♡」

トントン……♡トントン……♡♡トントン……♡♡♡

確かに心地よいリズム感じる。彼の指先が奥深くで、微妙に角度を変えながら動き回っている。その度に、散々抱かれ尽くしたのに、新たな快感スポットを見つけられてしまうようだった。

「どう？ 俺の指好き？」

「うん……好きい……♡ ケイトの指、気持ちいいよお……しゅきすぎるの……♡♡♡」

素直な反応を見て気を良くしたのか、彼は一層大胆な行動に出た。中指だけでなく、人差し指まで挿入してきたのだ。意外にもスムーズに入ったことに驚愕する間もなく、激しい抽送が始まった。

じゅぷじゅぷじゅぷじゅぷっ！！♡♡♡♡トント
ントントントントッ♡♡♡グチュグチュグチュグ
チュグチュグチュッッ！！！！♡♡♡♡

外から見たらガシガシＡＶのようなガシマン、しかし
内側から感じるのは計算されつくしたソフトタッチの
荒技……そのギャップにくらくらしてしまう。

「あっ！？♡ あ、あああっっ！！♡♡やめてやめ
て……ッ♡♡♡もう無理……♡♡♡おまんこ♡無理な
のお……♡♡♡」

ケイトの目が鈍く光る。優しさは消え獲物を狩る狼の
ような凶暴性が露わになる。「もう無理……♡」と震え
る私の声を遮るように、彼が命令した。

「黙れよ♡……姫は俺のオンナだろ？♡♡♡」

足首を掴まれソファに叩きつけられる。衝撃でスカ―
トがめくれ上がり、剥き出しになった下半身が宙に浮く
屈辱的な姿勢にされる。彼の怒涛したペニスが、濡れた
おまんこ襷に押し当てられた……。

「ひっっっ！？！？！？♡♡♡♡♡」

予想以上の質量に息が詰まる。濡れていない訳ではないのに……むしろ潤沢に潤っているのに、無理矢理おちんちんが押し入る感覚に、反射的に脚を閉じようとする。しかし、細いとは言え鍛えられた男の力で、ガッチリ固定され動く余地などない。

「動くなよ……♡♡♡」

ぐちゅうっ♡ めりめりめり……♡♡♡♡みちみちみち……♡♡♡♡♡♡♡

「ん……あ、きゃああああああ……っ！！♡♡」

「ん……♡キツいな……♡なんでこんなに締まっているの？♡ まるでレ○プしてるみたいなんだけど……？♡」

ケイトの低い声が、耳朶に絡みつく。彼の言葉は侮辱的だが、マゾ雌になった私には効きすぎる。背筋をぞくぞくさせる魔性を持っている。無理やり押し込められる圧迫感。苦悶しながらも、身体の奥がじわりと潤い始めるのを感じた。

「あぁっ♡ やめて……怖いよ……♡♡♡♡」

「へえ……今日は怖いのがいいんだ？♡♡♡甘々セック

スの日のつもりだったけど……じゃあ、優しくレ○プ
ごっこしようか……？♡♡♡」

そう言いながらも、おちんちんの動きは全く穏やかに
ならない。むしろ逆だった。さらに奥深くまで貫かれ、
子宮口を直接どちゅどちゅ♡突き上げられた。

「はっ♡ あああ！！♡♡ やあああん♡♡ 深すぎ……
るっ……たすけて……ッ♡♡」

「深いのが好きなんだろ？♡ 姫が子宮降ろして種付
け待ちしてるから、すぐチンコ届いちゃうんじゃん
♡ 俺のオンナなんだから、俺好みの淫乱に育てなきゃ
な……ってこんな感じ？♡♡興奮した？♡♡♡♡」

（ケイトなのに……旦那様なのに……♡♡イケナイコト
されてるみたいで、興奮しちゃう……♡♡♡♡）

パンッ♡パンッ♡パンッ♡パンッ♡バチュバ
チュバチュンッ！！♡♡♡パンパンパァアン！！
♡♡♡

荒々しいピストン運動が開始された。遠慮のない腰使
いでソファがギシギシ♡と悲鳴を上げる。結合部からは
泡立つ愛液が溢れ出し、濃厚な雌の匂いを放っていた。

「ほらほら♡ 女として生まれてよかったなあ？♡♡♡
俺専用の雌穴オナホにしてやるよ……♡♡♡」

「ひいんっ♡ そんなひどいこと……言わないでえ……
♡」

(あのケイトが……♡♡こんな荒々しいこと言うなんて……♡♡♡好きな人に犯される安心感と、乱暴に無理矢理犯される恐怖が混ざって……すごいかも……♡♡♡♡)

「生意気だな……♡♡反抗的な態度もキチンと教育し直してやるよ……♡♡オラッ！！♡♡♡」

「きゃあんっ！？♡♡♡♡」

ペチンッ♡♡♡♡と軽く尻を叩かれ、思わず声が上擦る。一瞬の痛みと快感の境界線が、曖昧になる。お尻がひりつく刺激に、脳みそが沸騰しそうになる。罵倒されても叱られても、ケイトになら喜んでしまう自分が情けない。

「も……無理い……♡♡おちんちん、おまんこ虐めるのやめてくだ……さい……♡♡♡」

「はああ……？♡♡♡」